火拳、第二の人生なり

RAB

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
火拳、第二の人生なり

【Ｎコード】
Ｎ２３６６Ｕ

【作者名】
ＲＡＢ

【あらすじ】
ルフィをかばい赤犬に殺されてしまったエース……
次に目をさましたらそこは見たことのない場所で…？
あれ??背が縮んでる!?
いや、１２歳くらいの姿にもどってる??

そんなエースがＨ×Ｈの世界で活躍するものがたりです。

＊注意書き＊（前書き）

勢いではじめちゃいました……

アドバイスなどよろしくお願いします！！

＊注意書き＊

この小説はＯＮＥ　ＰＩＥＣＥのエースが赤犬によって殺されたあとの物語です。

エースが死んだあと別の世界で活躍するなんて嫌！！

エースが子供の姿なんて嫌！！

という方はご遠慮下さい。

また、私は非常に国語の成績が悪く、日本語がおかしい場所が多々あるとおもいますが、ご指摘していただけるとうれしいです。

また、私はＯＮＥ　ＰＩＥＣＥの漫画を持っていないためエースの口調などがおかしかったりします。

そこもご指摘していただけると嬉しいです。

Ｈ×Ｈに関してですが、今の所原作沿いで進める予定です。

こんな展開にもっていってほしいなどというご要望がございましたら、ぜひ教えて下さい。

参考にしたいと思います。

＊注意書き＊（後書き）

ふー……とりあえず更新が停滞しないようにするのが第一の目的です！！

1　火拳、異世界に飛ばされる（前書き）

うー……

書き続けられるか心配です　汗

1　火拳、異世界に飛ばされる

真っ暗だ……

何も見えない……

ここは何処だ??俺はいったいどうしたんだ……?

あぁ、そうか死んだんだ。

だが、あいつを守れた。

それだけで十分だ。

後悔がないとはいえない……

あいつの夢の果てを見れなかったことは悲しい。

兄として最後まで見届けてやりたかった……

悔しい、そして悲しい……

『それならば、生きなさい。ポートガス・D・エース。』

……は??いや、俺死んだよな??

『それでは、行ってらっしゃい』

えっっ!?無視??あと何処に行くっていうんだよ!?

『世界が変わることにより、色々変わることがあるでしょうが、貴方ならきっと大丈夫です。ご武運をお祈りします。』

「世界が変わるってなんなんだよっっ??」

がばっっ

……

「あれ?俺生きてる??というか、ここ何処だ?」

日当たりが良く、温かみのある部屋。サイドテーブルの上を見てみると、洗面器とタオルが置かれている。どうやら誰かが俺のことを看病してくれていたみたいだ。

「あら、起きたのね。体調はどう??」

バッッと声がした方を見てみる。そこには髪の長い女性が一人いた。俺が気配に気づかないなんて相当の手練れか??

「そんなに警戒しなくても大丈夫よ。私はここで院長をしているマリナよ。あなたは?」

ふんわりとした笑につい警戒を解いてしまった。というか、よくよ

く考えてみれば、この状況をみる限り俺の看病をしてくれたのはマリナさんで間違いないだろう。つまり、わざわざ看病した俺を襲ったりはしないだろう。

「エースです。看病をしていただきありがとうございます。あと、此処は何処ですか？どういった状況で俺を看病することになったのですか？」

お礼をいった時に下げた頭を上げマリナさんをみると凄く驚いたような顔をした。

「どうされたんですか、マリナさん？？」

「あ、いえ、あまりにも子供らしくなくてビックリしただけよ。」

……子供？？

「……俺は２０歳ですよ？？」

「え！？どう見ても１１か１２歳くらいにしか見えないわよ！？」

そう言われて自分の身体をチェックしてみると、どうやら縮んでいるみたいだ。

「すみませんが、鏡を貸してくれませんか？」

「ええ、どうぞ。」

受け取った鏡を見てみると、確かに１１、１２歳くらいにしか見えない。

……これがあの声が言っていた、色々と変わることの一つか……

「ね、言ったでしょう。あとさっきの質問だけどここは、ヨークシンの外れにある孤児院よ。昨日の朝にあなたが孤児院の前で倒れていたのを保護したの。」

「それは本当にありがとうございます。あとヨークシンとはグランドラインの島ですか？」

「……あなた何言ってるの？？グランドラインって何のこと？？ヨークシンが島なわけないじゃない。というより、ヨークシンを知らないの？？子供でも知っている大都市だと思うけど。」

……どうやら本当に異世界に飛ばされたようだ……

1　火拳、異世界に飛ばされる（後書き）

口調違いすぎｗｗ

でもわかんなーい、（；▽；）ノ

誰か教えてください！！

2　火拳、決意する（前書き）

……皆さんの反応が怖いような楽しみのような……

更新遅いかもしれないですが、頑張りたいです。

2　火拳、決意する

俺はマリナさんに全てを話した。
普通なら頭おかしいんじゃねーの？と言われるような話を。
昔の俺だったらありえないな……
これもルフィや親父達やサボのおかげかな……
人を信じられるようになったのは。
マリナさんはあったさりと納得した。
「こんな話、普通なら信じないんじゃないですか？」
俺は自分で話しておきながら、こんなにあっさり納得するマリナさんに疑問を感じ尋ねてみた。
マリナさんはそんな俺にむかって笑みを向け、
「信じられるわよ。あなたの目は嘘を言っている目じゃないもの。
それに、嘘をつくならもっと信じやすい嘘を普通はいうでしょ？」
と言った。
「……そうですね。」
マリナさんと俺の視線が交わる。
マリナさんの目は、薄い青でキラキラしていた。
「……エース君、もしあなたが元の世界に戻れるかもしれないって言ったらどうする？」

「え……？」

何かを試すかのようにじっと俺を見つめてくる。

俺はその視線を反らさず見つめ返した。

「……もしそんな方法があるならば、俺は元の世界に戻りたい。兄としてあいつの、ルフィの成長を見届けたいんだ。……俺にその方法を教えてくれないか？」

さっきまで使っていた敬語ではなく、俺自身の口調で言った。

「私は厳しいわよ。そして、絶対に元の世界に戻れる方法に辿り着けるとも限らない……それでもあなたはその方法を知りたい？？」

「あぁ、頼む。」

こうして俺とマリナさんの師弟関係が結ばれた。

「あとエース君、口調はさっきのままでいいわよ。そっちの方がエース君らしくていいと思うわ。それに、エース君２０歳ですしね。」

「それじゃぁお言葉に甘えて。というか、マリナさん何歳なんだ？院長って２０代ぐらいの人が務めるものじゃないだろ？」

俺がその言葉を発した瞬間、さっきまで暖かかった部屋の気温がい

っきに下降したのを感じた。
恐る恐るマリナさんの顔を見ると、恐ろしいまでに輝いているマリナさんの笑顔が浮かべられていた。

「マッ…マリナさん??」

「うふふふふ……。エース君、女性にはね、聞いてはいけないことってあるのよ。元大人ならこれぐらい分かるわよね?」

俺はその笑顔を見てマリナさんにこの手の質問を一生しないことを固く誓った。

「すみませんでしたっっ!!」

「分かってくれればいいのよ。」

その言葉に安心して下げていた頭を上げると、そこにはまださっきと同じ笑顔を浮かべるマリナさんがいた。

「明日からの修行が楽しみだわ。ねぇ、エース君。」

俺はその瞬間、マリナさんは根に持つタイプだと確信した。

2　火拳、決意する（後書き）

文章書くって難しい！！

特に国語の成績がやばい私は……

訂正などぜひしてください！

3　火拳、新たな力を知る（前書き）

今の所毎日更新できててよかったです（^人^）

これからもがんばりたいです！！

3　火拳、新たな力を知る

俺はあの後、孤児院の子供達に紹介された。
そこにいた子供達の人数は思っていたよりも多かった。
赤ん坊からだいたい１５歳位までの子供が４０人くらい。
この小さな施設には不似合いな人数だ。
マリナさんに何でこんなに多いのかを聞いてみると、このヨークシンはマフィアとかいう賊が多く、そのマフィア達の抗争に巻き込まれ親を失った子供達がたくさん集まったからだと知った。
ついでに海賊はいるのかと聞いてみると、少しはいるけど昔程ではないらしい。
何だか違和感を感じた。

孤児院の子供達は入ってきたばかりの俺にとても良くしてくれた。
孤児院の子供達と接しているうちに気づいたことだが、ここにいる１０歳以上くらいの子供達の動きが洗練されている。
どうやらここでは、戦闘訓練もしているようだ。
まぁ、話によると、結構物騒な場所のようだから、ある程度の力は必要だろうな……
俺は漠然とそう感じた。

そんなこんなで、目が覚めてからの孤児院生活一日目は終わった。

次の日は、日が登ってすぐに起こされた。
はっきり言ってとても眠い……

言われていた場所に行ってみると、そこには昨日見た孤児院の子供達の中でも特に動きが洗練されていた子達が集まっていた。
疑問に思って、近くにいた孤児院の子に聞いてみると、この時間帯は限られた子達しかできない訓練をするめの時間らしい。
どうやら、マリナさんが俺に教えてくれようとしていることは、一般人には知られてはいけないようだ。
そんなことを考えているうちに、マリナさんがやって来た。

「皆おはよう。さぁ、訓練を始めるわよ。エース君以外はいつものをやっておいて。エース君はこっちに来て。」

「「「「はいっっ！！」」」」

孤児院の子供達は指示どうりに動く。
俺もマリナさんの方へ歩いて行った。

「エース君にはまず最初に、今の時点でのあなたの身体能力やできることを教えてもらいます。」

それを聞いて俺はふと思った。
今の体は１２歳程度である。
俺がこれぐらいの年齢の時はまだ、悪魔の実を食べていない。
つまり、今俺が炎人間かわからないということだ。
一応、タトゥーなどは残っているから、使えるかもしれないが。
俺は試しに火拳を使って見た。

ボッッ

「！？」

俺の手に炎が灯る。
マリナさんは非常に驚いている。
俺は安心した。
今では俺の当たり前になっていた能力を失わずにすんで。
これでわかったことは、俺の体は１２歳の頃に戻ったのではなく、縮んだということだ。

「……纏がされていないから‘念’ではないわね……エース君、これはどういう能力かしら？」

「これは俺の世界の能力で悪魔の実っていうものを食べることで発生する。俺は“メラメラの実”っていう悪魔の実を食べた“炎人間”なんだ。」

「凄いわね……この能力と念があったら……凄いことになりそう……」

マリナさんは何かを思案しているようで独り言をつぶやいている。

「というか、さっきから出てくる‘念’ってなんなんだ？」

「え？あぁ、まだ説明していなかったわね。‘念’っていうのは、簡単に言うとこちらの世界の超能力ね。しかも誰もがその素質をもっている……まぁ、才能の差とかはあるけどね。そして、人それぞれどんな能力になるか変わるわ。」

……すごいな……
そんなのがこの世界にはあるのか……

「ってことは、もしかしたら俺の能力が元の世界に戻れるものにな

るかもしれないってことか??」

「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれないわ。人それぞれ自分にあう系統ってものがあるから、あなたにあえば作れるかもね。まぁ、そうじゃなくても、この世界のどこかに異世界に渡れる能力とかがあるかもしれないでしょ。……可能性の範囲だけどね。」

俺はそれを聞いて俄然やる気が出た。
もし俺の能力では無理でもこの能力とメラメラの実の能力を足せば今より絶対に強くなれるからだ。
せっかく元の世界に戻ってもすぐに死んだら嫌だしな。

こうして俺の念修行が始まった。

3　火拳、新たな力を知る（後書き）

念の説明って難しい……

どこか間違っていたら、教えてください！

4　火拳、異世界を学ぶ（前書き）

明日から学校……

今までどうり更新できないかも……

でも、できる限り更新頑張るので、見捨てないでください！！

4　火拳、異世界を学ぶ

それから俺はマリナさんに、念、というものを詳しく教えてもらった。

纏　絶　練　発……

聞いていて、何だか少し覇気に似ている感じがした。

「エース君、念を起こすには2つの方法があるのだけどどっちがいい？1つ目は、ゆっくり自分で起こすこと。これは、危険は少ないけど、人によって念が起きる時間が変わるわ。2つ目は、無理やり起こす方法。これは、失敗すると死ぬ可能性が出てくるわ。エース君はどっちにする？」

考えるまでもない。

俺は少しでも早く元の世界に戻りたいのだ。

「無理やりで、お願いします。」

マリナさんの顔を見ると、やっぱり……みたいな表情を浮かべていた。

「まぁ取り合えず、朝の訓練の時間はもうすぐ終わるわ。念はね、一般人には知られてはいけない能力だから、ここでは朝と夜しかしていないの。昼は、念を使用しない身体能力の訓練。だから、念を起こすのは早くて今日の夜。もし、あなたの身体能力が念を覚えるのに不十分ならば、念を起こすのは延期になる。いいわね？」

つまり、それほど念を覚えることは危険っていうことか……

俺はマリナさんの言葉にうなずいた。

「さぁ、皆そろそろ朝食の準備をしましょう！きりがいいところで訓練をやめて戻るわよ！！」

マリナさんの声が響く。
皆それぞれ自分の訓練をやめ、マリナさんの指示に従う。

「エース！！どうだった？念の初訓練は？？」

俺に話しかけて来たのはこの孤児院の子供達の中で最年長のカナタだ。
最年長って言っても、１６歳だが……
まぁ、この中では、俺の本当の年齢に一番近いせいか、とても話しやすい。

「あぁ、とっても面白そうだな！！早く覚えたいぜ！」

「俺も初めて念を知った時は、めっちゃ興奮したなぁー……まぁ、焦りは禁物だぜ。特に念はな……それより早く食堂に行こうぜ！早く行かないと他の奴らに俺らの分まで食われちまう！！」

「おうよ！！」

俺とカナタは急いで食堂まで行った。
食堂に入ると、他の皆に遅いなど文句を言われる。

「皆席に着いたわね。それでは、手を合わせて、いただきます。」

「「「「いただきます！！」」」」

皆凄い勢いで食べる。
もちろん、俺もだ。

パクパクモグモグ……ドン……

「エース!?おい、しっかりしろ!!」

カナタの心配そうな声が響く。

「んん?あー、よく寝た〜」

「「「「寝てたんかい!!」」」」

周りを見渡すと、皆ひどく驚いた表情をして突っ込んできた。

「……あぁ、言ってなかったっけ?俺、食事中に寝ちまう癖があるんだ。だから、俺が食事中に倒れても気にすんな!!」

（（（（どんな癖だよ……））））

昨日の時点では、この癖が出なかった。
やはり、少し緊張していたのだろう……
つまり、この環境になれてきた証拠だな……
俺はそう感じた。

食事も終わり、午前中は勉強の時間だ。
はっきり言って俺は勉強が嫌いだ。
しかし、嫌いだからと言ってこの世界の文字を覚えないわけにはいかない。
俺は必死に勉強した。

この世界の文字は「ハンター文字」というらしい。
ハンターとは何だ？とマリナさんに聞くと、この世界の職業の一つらしい。
その資格さえあれば、世界中のほとんどを旅することができるようになるらしい。
しかも、身分証明書にもなり、世界の公共施設や宿泊施設のほとんどがタダになるらしい……
まぁ、取得するのは困難らしいが。
しかし、これは俺にとって凄く良いものではないか？
元の世界に戻る方法を探すために世界中を旅したいし、身分証明書を持たない俺にはちょうどいい。

当面の目標はハンターになることだな。

そうと決めたらまず、ハンター文字を覚えなきゃな……

俺は再び勉強を開始した。

4　火拳、異世界を学ぶ（後書き）

何かおかしいところありますかね？

今、原作が手元にないので不安です…

早く友人から返してもらいたいです。

5　火拳、力の片鱗を見せる（前書き）

一回書いたのに、ミスして消してしまった……

ショックでした……

5　火拳、力の片鱗を見せる

午前の勉強時間が終わった時、俺は死んでいた……
こんなに勉強をすることは初めてだったからだ。
つまり、力尽きて燃えかすになったのだ。
隣を見ると、カナタも燃えかすになっていた。
……こいつは、俺と同じ【バカ】のにおいがする……

机に突っ伏していると、マリナさんが部屋に入ってきた。

「皆、勉強を良く頑張ったわね。さぁ、昼ご飯を食べましょう！皆食堂に集まって！！」

マリナさんのその言葉に全員がダッシュで食堂に駆け込んだ。
どうやら皆、勉強で体力や気力を消耗したことにより、そうとうお腹が空いているようだ。

食堂に着くと、そこには美味しそうなご飯が並んでいた。
全員が席に着き、朝と同様にマリナさんの号令で食べ始める。

俺はご飯を食べることで、勉強によって消耗した体力や気力を回復した。
ついでに、俺の癖については、もう誰も突っ込まなかった。
朝ので皆慣れたらしい……
どうやら皆、順応力が高いようだ。

午後は、身体能力の訓練をする時間だ。
皆それぞれ自分のメニューを開始する。
俺は取り合えず、マリナさんの指示を仰ぎに行った。

「エース君はまず、念を覚えるのにふさわしい身体能力を持っているかチェックします。最初にランニングであなたの体力を測りましょうか。」

「了解！」

俺は3時間以上走り続けた。
これぐらいじゃ、汗なんて出ない。

「終了！体力は全く問題ないわね。次は腕力を測ります！ここにあるダンベルを持ち上げてもらいます。重さの最高は2トン。特別製でもこれ以上は無理だったからね……」

俺は並べられているダンベルを見た。
どうみても、2トンあるようには見えない。
取り合えず、俺は2トンのダンベルを持ち上げた。

スイッッ

「！？」

……普通に持ち上げられた……
マリナさんは驚いているようだが、これぐらいは余裕だ。

「……腕力もOKね。最後にあなたの武術の力を測ります！そうねぇ、エース君はカナタ君と仲がいいみたいだから、カナタ君と組手をしてもらいましょう。カナタ君ー！！エース君と組手をしてくれないかしら？」

「分かりました！」

俺とカナタが向き合う。
マリナさんの合図により組手を始めた。

……一瞬で片が付いたが……

まぁ、当然だろう。
海賊の俺に一般人に少し毛が生えたような人間が勝てるはずがない。
カナタは、見た目年下の俺に負けたことにショックを受けているようだ。

「子供達の中で一番強いカナタ君をこんなにあっさり負かすなんて……エース君、あなたは合格よ。早速今晩から念の訓練を始めましょう。」

「はいっっ！！」

やっと念の訓練を始められる……
楽しみだな……

5　火拳、力の片鱗を見せる（後書き）

エース君、念無しで纏をしている少年に圧勝ｗ

これからちょっとチート化するかも……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2366u/

火拳、第二の人生なり

2011年7月24日19時09分発行